

## 文章構成を考えて書くことができる児童の育成

教職実践基礎領域  
牧 和香奈

### I はじめに

なぜ子どもは原稿用紙を渡すと手が止まってしまふのだろうか。この疑問が本研究の出発点である。

私は、約2年間、トワイライトスクールで地域協力員（AP）としてボランティア活動をしていた。そこでは、学習タイムの時に、宿題をする児童の姿が多く見られた。ある児童は日記を書くときに、自分が経験したことや思ったことをなかなか書くことができなかつた。普段から、友達や専門員そしてAPにも元気よく明るい声で話し掛けることのできる児童であっても、白い用紙を渡すと固まってしまふ。その子らしい豊かな発想力があるのに、鉛筆を握った途端に何をどう書いたら良いのか分からず、困惑しているように見える。そのような児童の姿を見て、どうしたら文章をスラスラ書くことができるようになるのだろうかと感じた。

大学院在学中には、名古屋市立公立小学校で約1年半のサポーター活動、1か月ずつの教師力向上実習Ⅰ・Ⅱをさせていただいた。そこでもやはり、思うように書くことができない児童の姿を見た。

「書くことができない子どもへのアプローチはどのようにするべきなのか。」

この疑問を基に本研究のテーマを、「文章構成を考えて書くことができる児童の育成」とし、「授業づくり」に焦点を当てて取り組んだ成果と課題を報告する。

### II 主題設定の理由

#### 1 今日の教育課題から

近年では、グローバル化や世の中が急激に変化することに伴い、先行きが不透明な社会になってきている。これまでの知識詰め込み型の学習では、それらに柔軟に対応できる人材が育たないのではないかという今日の教育に対する危機感がある。そこで、これまでの「基礎的基本的な知識・技能」の蓄積に加えて、それを活用するための「思考力・判断力・表現力」、そして、「主体的に取り組む態度」を、「学力の3要素」と位置付け、それらをバランス良く身に付けさせることで時代の変化に適応できる人材を社会に送り出そうとしているのが近年の教育改革のねらいである。

2015年にOECDが実施したPISA調査によると、日本は国際的に見ると、科学的リテラシー、読解

力、数学的リテラシーの三つの分野において、平均得点が高いグループに位置している\*<sup>1)</sup>。しかし、前回調査と比較すると、「読解力」の平均点が低下していることが分かった。国立教育政策研究所は、低下の要因の一つとして、「参加国の一部を除き、コンピューター使用型調査へ全面的に移行した」ことを挙げているが、従来から見られた「自分の考えを説明すること」などに課題があることについても指摘している。読解力の向上に向けた対応策には、「文章の構造と内容の把握、文章を基にした考えの形成など、文章を読むプロセスに着目した学習の充実」が指導の改善・充実の一つとして示されており、文章の構成や展開について記述を基に捉える学習や、文章を読んで理解したことを基に考えを深める学習の充実などによって、学習の基盤となる言語能力の育成が図られるとしている。

平成28年度中央教育審議会答申には、次期学習指導要領の策定に向けた現状の課題整理及び必要な方策等の提示が示されている\*<sup>2)</sup>。

国語科における教育のイメージとして、小学校段階では「創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする」ことが挙げられている。また国語科において育成を目指す資質・能力には、知識・技能の一つとして「言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け」が挙げられている。さらに、この中には文章の構成や文章の構造といった文と文の関係、段落、段落と文章の関係などが習得すべき事項として示されている。

こうした一連の教育改革の一つとして、2020年に大学入試制度が大きく変わる。共通一次試験から大学入試センター試験に代わって以来、30年ぶりの大改革である。平成32年から導入される「大学入学希望者学力評価テスト」（仮称）では、記述問題を大幅に増やすとされる。自分の考えを記述することのできる力が要求されることになり、「書くこと」の重要性がより高まると言える。

#### 2 名古屋市の全国学力・学習状況調査の結果から

平成27年度の「全国学力・学習状況調査」における名古屋市の小学生の国語の力について、名古屋市教育委員会は良い点と課題を、次のように示している\*<sup>3)</sup>（資料1）。

	良い点	課題
A 知識	作品募集の案内に書かれた留意点から、必要な情報を読み取る。	漢字を正しく書いたり、文の中からどれが主語であるかを見付けたりする。
B 活用	文章の中から、中心となる語をつかみ、内容を理解する。	取材した内容を整理して新聞の記事を書いたり、文章と図とを関係付けて自分の考えを書いたりする。

【資料1 名古屋市の「全国学力・学習状況調査」小学校・国語科における良い点と課題】

この結果から、必要な情報や文章の内容を読み取ることができることが分かる。一方で、「読み取った本文の内容や情報を整理して書くこと、文章と図とを関係付けて自分の考えを書くこと」が活用に関する課題として挙げられている。

この課題の解決のためには、文章を書く際に、いろいろな情報を分析して、その内容を整理して組み立てるといふ、文章を構成して書く力を育成していくことが必要であると考えられる。

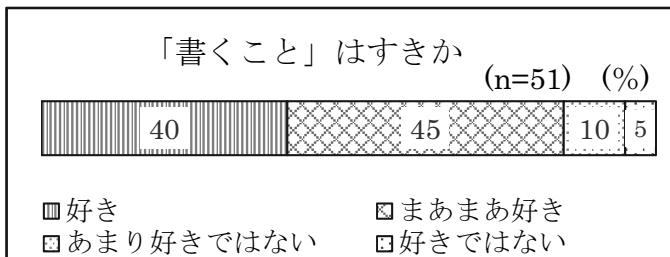
### 3 連携協力校の児童の実態から

連携協力校では、名古屋市の国語科の課題から、努力点委員会で「書くこと」について研究している。テーマは「書く楽しさ 伝え合う喜び—『書く技能』と『書く意欲』を高める指導を工夫して—」である。

前年度の学校努力点委員会では、国語科の「書くこと」に関する領域についての研究を行った。

平成27年度の3学期に第3学年の児童を対象に行われた「書くこと」についての質問紙調査では以下のグラフのような結果となった(資料2)。

設問：「書くこと」は好きですか。



【資料2 「書くこと」についての意識調査】

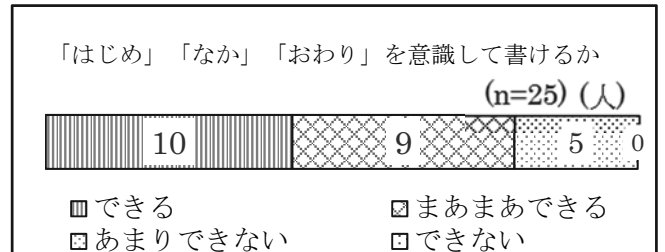
「書くこと」が「好き」、「まあまあ好き」と答えた児童を合わせると85%になり、書くことが好きな児童が多い学年であることが分かる。

しかし当時の担任の先生方によると、書くことが好きと答えている児童すべてが実際に書いているわけではなく、一部の児童については自分で文章を考えることができなかったり、書き方のルールがわからなかったりと「書くこと」に対して課題のある児童がいるということだった。

そこで4月になり、本研究の対象となる4年1組の児童に対し、文章を書くことについての調査を行った。

① 調査日	平成28年4月
② 調査方法	質問紙法、自由記述法
③ 調査対象	名古屋市立公立小学校 第4学年1組 25名

設問1：「はじめ」「なか」「おわり」を意識して書くことができますか。



【資料3 文章構成を意識しているかの意識調査】

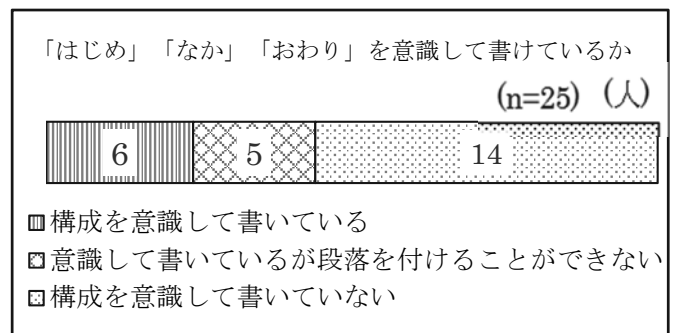
この結果から、「できる」、「まあまあできる」と答えた児童は25人中19人だった(資料3)。多くの児童が、「はじめ」「なか」「おわり」という文章の構成を知識として知っており、それを意識して書くことができると思っていることが分かる。

質問紙調査と同時に、主題に対して自由に作文を書かせる調査も行った。

＜題＞

「あなたは無人島に行きます。持ち物を三つ持っていくとしたら、何を持っていきますか。」

この調査は実際に児童が文章構成を意識して書くことができるかを調べるためのものである。上記の題を示し、「無人島には何を持っていくか」とその理由も含め400字詰め原稿用紙に10分間で書かせた。すると以下のような結果が出た(資料4)。



【資料4 「書くこと」の質的調査結果】

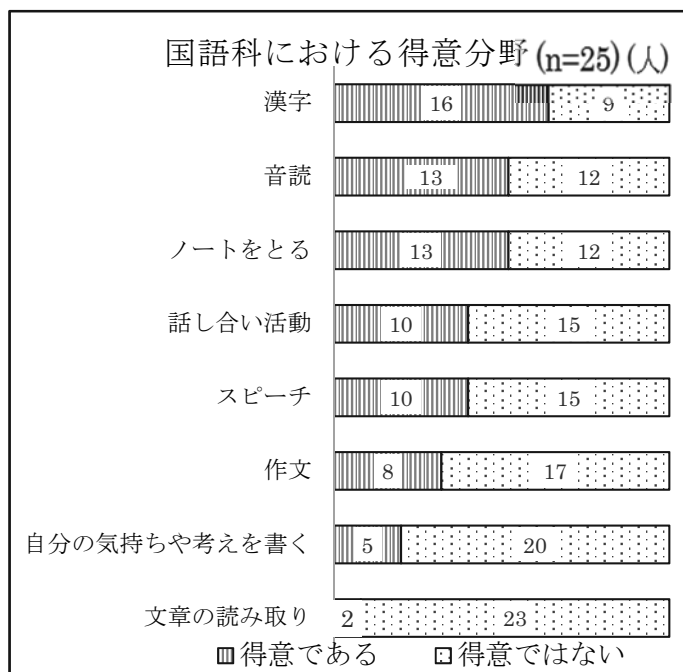
この結果から、段落などの文章の構成を意識して書くことができる児童は、6人のみであった。設問1と合わせて考えると、文章の構成を意識することができるという児童の意識と実際の作文には大きなギャップがあることが分かった。このことは、3年生当時の質問紙調査と教員から見た子どもの様子とも類似した結果となった。

これらのことから、児童は知識として「はじめ」

「なか」「おわり」を知っているが、実際に活用できる段階まで達していないことが明らかになった。

さらに国語科における様々な学習内容に対する意識を調査したところ、以下のような結果が出た(資料5)。

設問2：次の中で、どの学習が得意ですか。  
(複数回答可)



【資料5 国語科における得意分野】

この結果から、連携協力校の児童は、「文章の読み取り」(「読解力」)や「自分の気持ちや考えを書く」こと、さらに「作文」に課題を感じていることが分かった。

3年生の3学期当時の書くことが好きかどうかの意識調査と比較してみると、「書くこと」が好きな児童が8割を超えたにもかかわらず、進級後すぐの意識調査では得意と答えた児童は8人だった。作文を書くことは好きだが、得意とは言い切れないという児童の意識を読み取ることができた。作文を書くことを得意にすることは、「自分の気持ちや考えが書ける」ようになることにつながると考える。これらのことから国語科における作文指導について研究する意義は大きいと考える。

4 目指す児童像

今日的な教育課題と連携協力校の児童の実態から、私は子どもの「書く力」を育てたいと考えた。中でも文章を書く際に大切な、書きたい内容を分析・整理して組み立てるといふ、文章を書く上で最も基本的な力である文章を構成する力を育てたい。

そこで、本研究の目指す児童像を次のように設定する。

文章構成を考えて書くことができる児童

III 研究の構想

1 基本的な考え方

本研究で取り扱う作文指導は、文学作品を作り出すための指導ではなく、説明文が書けるようになることを目的とする。

佐藤(2011)は、『論理的な表現力・記述力』の開発を、系統的な『読解力』育成指導との関連から捉え直す<sup>4)</sup>と述べている。さらに『習得』した知識・技能は自分の立場や課題意識から論理的に記述・報告・説明できたり、字数・詳しさ・相手などの『条件』に応じて発信できる言語技術に展開しなければ新学習指導要領の趣旨を生かした『生きる力』にはならない<sup>5)</sup>としている。

また市毛(1997)によると、「作文指導を行うには文章の構成が明確である説明文を扱うことが適切である<sup>6)</sup>」とされている。このことから、説明文教材を作文のモデルとして提示し、本文を読み取ったり構成を考えたりすることによって、文章構成を考えて書くことができる児童になるのではないかと考えた。以下に、児童の書く力を育成するのに適切で使いやすい説明文教材を市毛(1997)がまとめたものを示す(資料6)。

教材名	かぶとがにを守る	キョウリュウをさぐる	花を見つける手がかり	アーチ橋のしくみ
社名	光村図書	光村図書	教育出版	教育出版
種類	報告	報告	論説	報告
文章構成が明確	◎	◎	◎	◎
短くまとまっている	◎	○	◎	◎
段落「一段落一事項」	◎	◎	◎	◎
キーワードが取り出せる	◎	◎	◎	◎
まとめかた	◎	◎	◎	◎
作文指導の手本	◎	◎	◎	◎

【資料6 市毛(1997)より説明文教材「使いやすさ」評価一覧表(小学校)第4学年のみ記載】

文章構成を考えて書くことができる児童を育成するために必要な基本的な考え方を2点示す。

一つ目は、文章全体における各段落の位置付けを考えることである。岩下(2016)は、説明的作文の基本型を以下のように示している<sup>6)</sup>。

テーマ (仮題)  
 ①はじめ…話材の提示  
 ②なか1…説明その1  
 ③なか2…説明その2  
 ④まとめ…なか1・2の共通項

そして『まとめ』は『なか1』、『なか2』の二つのことを書いて、今気づいたことや分かったことを書かせる<sup>7)</sup>としている。そうすることで「一貫した内容の文章を書くことができ、より相手に伝わりやすい文章を書くことができる」と述べている。

二つ目は、考えたことを整理し、短い文章で表すことである。文章構成には「一段落一事項」の原則

がある。そのことについて市毛(1997)は、「各段落のキーワードを抜き出し、そのキーワードを用いながら、各段落に書かれている内容を説明する学習を行うことで、ものごとの核心と枝葉とを区別し、頭に入れることができる。すなわち、作文を書く段階で必要な抽象能力を鍛える学習を行うことができる」と述べている。さらに、「この力が作文を書く際の『書きたい内容は何か』という問いに、要点を取り出して話すことができる力となる」としている。

以上の2点から、私の目指す「文章構成を考えて書くことができる児童」を育てるためには、以下の力が必要であると考える。

- ① 文章全体における各段落の位置付けを考える力
- ② 考えたことを整理して短い文章で表す力

## 2 研究の方法と手立て

本研究では、習得の段階として説明文教材の読み取りをした後、活用の段階として単元の最後に子どもが自力で取り組める課題を設定し、最終表現物を制作させる。その課題を具体化するために、以下の二つの手立てを講じる。

### (1) 手立て①文章構成表

文章構成表は、本文の内容や自分の考えの【記録→蓄積→一覧化】を図るために、一枚のプリントに本文の内容を段落ごとにまとめていくものである。授業の習得の段階でこの構成表を配布し、本文の内容などを整理してまとめさせていく。【記録】【蓄積】

そうすることによって長い本文の内容であっても、一目で見ることができ、記述した内容を基に文章の全体像を俯瞰することと、各段落の内容を詳細に捉えることが同時にできる。【一覧化】

本実践における文章構成表によって培われる要素は三つある。実習Ⅰでは、これらのうち二つの要素を組み合わせ、力①文章全体における各段落の位置付けを考える力を育てていく。

一つ目の要素は、段落構成の理解である。児童に各段落の内容をまとめさせて、文章の構成を考えさせることによって、最終表現物に文章構成を意識して記述させるねらいがある。

二つ目の要素は、本文内容の把握である。段落ごとの内容、最終表現物に書く内容を毎時間書かためていくことによって、各段落の内容を正確に読み取らせるねらいがある。

さらに、実習Ⅱでは力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てるために三つ目の要素として、思考の整理を挙げる。毎時間の授業内に児童が考えたことを整理して、それを記述させる。書きたい内容を整理して書くことを繰り返すことで、最終表現物においても、短い言葉で端的に内容をまとめられるようにするねらいがある。

これらの三つの要素を組み合わせることによって、二つの力を伸ばし、「文章構成を考えて書くことができる児童」の姿に迫っていく。

### (2) 手立て②最終表現物に対する支援

最終表現物として、実習Ⅰでは紙芝居を制作させ、実習Ⅱでは紹介文を書かせる。児童が習得の段階で学んだ段落構成を基に、自力で考えた構成や文章を、学習の成果として表現することができるようにするために、手立て②として最終表現物に対する支援を行う。

実習Ⅰでは、紙芝居制作に対する支援として「絵コンテ」を作成させる。

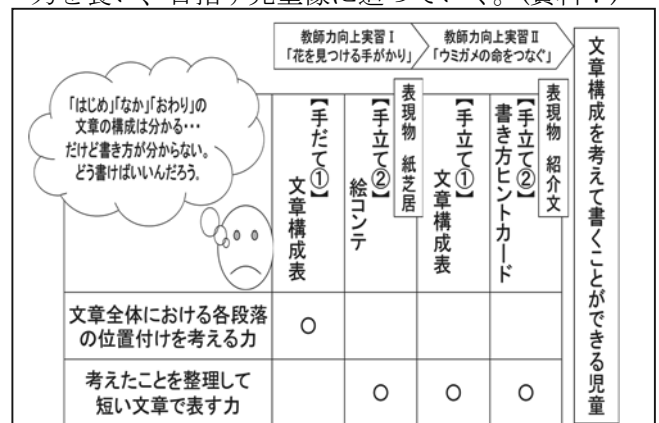
市毛(1997)は、「文章のあらましを要領よく話す(すなわち抽象能力を鍛える)学習が身に付いてくると、作文の時に役に立つのである。『自分の書きたい内容は何か言ってごらん』と言われたときに、もし何かを思い浮かべているのであれば、『私が書こうとしているのは…』と、その要点を取り出して言うことができる」と述べている。数ページに渡る説明文を、紙芝居の何枚かに分けて書くとき、1枚の中に本文の内容を端的に表す必要がある。紙芝居制作の前段階に絵コンテを作成させることで、市毛の言う「抽象能力を鍛え」、力②考えたことを整理して短い文章で表す力を養う。

実習Ⅱでは、紹介文作成に対する支援として「書き方ヒントカード」を与え、紹介文を書く参考にさせる。

岩下(2016)は、文章を書くことが苦手な児童に対する指導に関して、「このカードを見たら、何を書いたらよいかが目瞭然という『書き方ヒントカード』を配布する。作文のモデル文を見ただけでは書き出せない子がいるためだ」と述べている。紹介文に書くべきことが明確になり、その内容を焦点化することができるような「書き方ヒントカード」を配布し、参考にさせることで、「文章構成を考えて書くことができる児童」に必要な力②考えたことを短い文章で表す力が培われると考える。

## 3 研究構想図

本研究では、以上の二つの手立てを講じて二つの力を養い、目指す児童像に迫っていく。(資料7)



【資料7 研究構想図】

#### 4 検証項目について

本研究において次の2点を検証項目として設定する。

##### (1) 検証項目1

手立て①の文章構成表が有効であったかを確認するために、各授業での児童の記述や最終表現物などから検証する。

##### (2) 検証項目2

手立て②の最終表現物に対する支援が有効であったかを確認するために、最終表現物から検証する。

### IV 教師力向上実習 I における実践の報告

- ① 対象 名古屋市立公立小学校  
第4学年1組25名
- ② 期間 平成28年5月9日～6月3日
- ③ 単元 国語科「花を見つける手がかり」

#### 1 実践の内容

実践 I では、「花を見つける手がかり」という説明文教材で実践をした(資料8)。この教材は表2にもある通り、市毛(1997)が提示している作文指導に適した教材である。本単元では、まず習得の段階において、文章構成表を活用して本文の各段落の内容を理解させる。「結果」と「結論」の関係に着目させながら、本文の内容を区別して整理していく。そして活用の段階における最終表現物として、各班に分かれ、「もんしろちょうのよく集まる花」をテーマとした「紙芝居」を制作させる。

#### 2 単元計画

	学習内容	時数
習得	○学習の見通しをもつ ・花を見つける手がかりを予想する	1
	○「はじめ」を読み取る ・問題文と3つの手がかりを確認する。 ・「はじめ」の要約をする	1
	○「なか1～3」を読み取る ・実験のねらいや結果と、そこから筆者が考えたこととの関係に気を付けて文章を読む ・「なか1～3」の要約をする	3
	○「まとめ」を読み取る ・「まとめ」の要約をする ・文章からわかったことを振り返る	1
活用	○文章構成を理解する ・文章を書くポイントを考える。	1
	○「もんしろちょうのよく集まる花」について説明する文章を書く ・文章構成メモを使って文章を組み立てる	2

【資料8 実習 I の単元構想】

#### 手立て①文章構成表

本単元で扱う文章構成表は、本文の七つの段落の内容を「結果」と「結論」とに区別してまとめているものである。力①文章全体における各段落の位置付けを考える力を育てることをねらいとしている。正確な本文理解をするために、紙芝居制作の前段階として、本文を「はじめ」「なか」「おわり」に分ける活動を取り入れて、文章構成表を活用させていく。(資料9)

＜段落構成の理解＞						
おわり	なか			はじめ		構成段落
7	6	5	4	3	2	1
＜本文内容の把握＞						
もんしろちょうは、花の色、形、においのどれを手がかりに花を見つけているのか。	花の色か形かにおいをたしかめる3つの実験から、結論としてもんしろちょうは色を手がかりにしていることがわかった。	花の色か形かにおいをたしかめる3つの実験から、結論としてもんしろちょうは色を手がかりにしていることがわかった。	花の色か形かにおいをたしかめる3つの実験から、結論としてもんしろちょうは色を手がかりにしていることがわかった。	花の色か形かにおいをたしかめる3つの実験から、結論としてもんしろちょうは色を手がかりにしていることがわかった。	花の色か形かにおいをたしかめる3つの実験から、結論としてもんしろちょうは色を手がかりにしていることがわかった。	花の色か形かにおいをたしかめる3つの実験から、結論としてもんしろちょうは色を手がかりにしていることがわかった。

【資料9 実習 I における文章構成表】

#### 手立て②紙芝居をつくるための絵コンテ

実践 I の最終表現物である「紙芝居」の制作に先立って、「絵コンテ」の作成を設定した(資料10)。力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てることをねらいとしている。紙芝居は「もんしろちょうのよく集まる花」をテーマとして、7枚から10枚の間で制作するよう指示する。そして、絵コンテを配布し、大事な言葉や伝えたい内容を短い文章で書き込ませ、紙芝居制作計画を立てさせる。

かみしばい こう成シート (△)はん		
絵 問い	絵 実験に必要なもの	絵 実験1
文 花の色か形かにおいか	文 映画のカメラ。200匹のもんしろちょう	文 色について調べるための実験。本当は形やにおいかもしれない
絵 実験2	絵 実験3	絵 問いの答え
文 においについて調べるための実験	文 色か形かを調べるための実験	文 色を手掛かりにしていた。
絵 よく集まる花	絵 筆者の考え	絵
文 もんしろちょうがよく集まる花の紹介をする	文 実験と観察を重ねていくことで仕組みが分かる	文

【資料10 絵コンテの例】

#### 3 授業の様子

習得の場面では、文章構成表に各段落を要約して毎時間蓄積していった。「結果」と「結論」とに区別して書くことについて児童は混乱していた。そこで「結果は○○になった」や「結論として筆者は△△と考えた」などの文型を提示することで「結果」と「結

論」を区別して本文の内容をまとめることができた。

活用の場面では、班ごとに紙芝居を制作する活動を行った。制作前に、「花を見つける手がかり」を7枚から10枚の紙芝居にすること、それを3年生に向けて発表することを伝えた。児童から、「10枚ってどう書けばいいんだろう」という声が上がった。そこで「これは紙芝居の設計図です。この枠を使って書くことをまとめてごらん」と指示しながら、絵コンテの用紙を配布した。さらに、本文の内容を読み返したり、習得段階で作成してきた文章構成表を参考にしたりするように促すと、話し合いながら作業に取り組み、紙芝居を完成させることができた。完成させた紙芝居(資料12)は、3年生を前に発表した。(資料11)



【資料11 紙芝居を3年生の児童に向けて発表する児童】

#### 4 実践の結果と考察

##### (1) 検証項目1について

##### 【実践の結果】

検証1 文章構成表の作成と活用は文章全体における各段落の位置付けを考える力を付けることに効果があったか。

① 文章構成表の使用状況と絵コンテの段落構成から検証する。

A 文章構成表の段落構成を参考に、絵コンテを作成している…全ての班

B 文章構成表の段落構成を参考に、絵コンテを作成していない…該当班なし

② 本文の各段落の位置付けを一人で考えた後の文章構成表の記述から検証する。

C 段落の位置付けが適切に示されている…19人

D 示されていない…6人

##### 【検証項目1の考察】

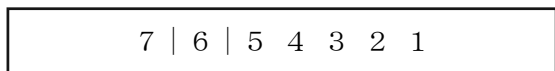
これらの結果から、すべての班が文章構成表の段落を参考に絵コンテを作成し、加えてその絵コンテの構成が適切であると判断されたため、文章構成文章表は有効であったと考える。実際の授業では、まず文章構成表を使い、各段落の位置付けを一人で考えさせた。さらに絵コンテを使い、各班に分かれ再度

	<p>①今からもんしろちょうのよく集まる花について紙芝居を始めます。もんしろちょうは日本中どこにでもいるありふれたちょうです。もんしろちょうは花に止まってみつを吸います。何を手掛かりに花を見つけているのでしょうか。色か形かにおいかどうか。</p>
	<p>②東京農工大学の日高敏隆先生と実験します。実験にはたくさんのもんしろちょうが必要です。一度に二百匹ほどのちょうを放し、花を見つける様子を映画のカメラで記録します。実験に使うちょうは青虫から育てます。</p>
	<p>③まず花壇の花を使った実験をします。花の色は赤・黄・青・紫の四色です。生まれて花を見たことのないもんしろちょうをいっせいに放しました。よく見ると、紫に集まっていますが、赤には集まっています。ちょうは色で花を見つけるのでしょうか。それともにおいでしょうか。</p>
	<p>④そこで今度はにおいのしないプラスチックの花を使うことにしました。色は花壇と同じ四種類です。もんしろちょうを放すとやっぱり造花に飛んでいきます。止まってみつを吸おうとするものもいます。造花にはみつにもおいもありません。ですから二つ目の実験からにおいではなく花の色か形にひかれていると考えられるでしょう。</p>
	<p>⑤色か形かを調べるための実験をしました。実験に必要なものは四角い色紙です。結果、もんしろちょうは、長い口でみつを吸おうとしています。結論として、色紙を花だと思っていると考えられます。</p>
	<p>⑥色か形かにおいかを確かめる三つの実験から色を手掛かりにしていることが分かりました。色も見分けることができるようで、紫や黄色は見つけやすく赤は見えないらしいです。</p>
	<p>⑦もんしろちょうのよく集まる花はだいごんの花と菜の花ときゅうりの花とダリアの花です。</p>
	<p>⑧そこで考え方の順序を立てて実験と観察を重ねていけば、その仕組みを探っていくことができるのです。</p>

【資料12 紙芝居】

話し合いをさせた。二度にわたり各段落の位置付けを考えさせたことで、児童は自分の考えた段落の位置付けを熟考することができたと考える。

②より、一人で考えさせた際に各段落の位置付けを適切に示されていない児童が6人いた。これらの児童の中に、7つの段落を以下のように分けている児童がいた。(資料13)



【資料13 文章全体における各段落の位置付け】

この児童は、1～5段落の「問い」と「実験内容」を一つのまとまりとし、6段落の「実験の結果」と7段落の「筆者の考え」とに分け、三つのまとまりを構成している。この構成は、これまで学習してきた「はじめ」「なか」「おわり」という知識を基にして、適切に分けることができている。一つひとつの段落の内容に着目するあまり、本文全体の構成に目を向けることができなかつたものと考え。文章構成表では、各段落の内容のみに着目させるのではなく、筆者の問いやまとめなどの「意見」と実際に起こった出来事である「事実」という大きな枠組みで文章全体を捉えることができるようにする必要があったと考える。

(2) 検証項目2

【実践の結果】

検証2 絵コンテの作成と活用は、考えたことを整理して短い文章を表す力を付けることに効果があったか。

最終表現物である「紙芝居」の内容から検証する。

E 絵コンテに書いたことを参考に、内容を整理して短い文章で台本を記述している…15人

F 短い文章で台本を記述していない…10人

【検証項目2の考察】

この結果から、「絵コンテ」に記述したことを参考に台本を記述し短い文章でまとめることができた児童が一定数見られるため、絵コンテはある程度には有効だったと考える。「絵コンテ」を書かせることは10枚という制限のある紙芝居に書くべき内容を絞り込んで整理することに役立つと考え、取り入れた。絵コンテを作成した上で、紙芝居の台本を作成したため、短い文章で記述できた児童は「何を書くか」がより明確になり、市毛の言う「抽象能力を鍛え」ることにつながったと考えられる。

一方で、短い文章で記述することができなかった児童は、3年生に分かりやすく伝えようとするあまり、説明するための言葉の説明を増やしたり、説明が重複したりしていた。このことから、「絵コンテ」自体にも短い文章で内容を書かせる必要があり、書きたいことを一言にまとめ、短い文章で表すことによって、書く内容を焦点化させる必要があった。

5 教師力向上実習Ⅱに向けた改善

実習Ⅰでは、連携協力校の児童が、力①文章全体に

おける各段落の位置付けを考える力を付けてきていることが分かった。そこで実習Ⅱでは、十分培うことのできなかつた力②考えたことを整理して短い文章で表す力を重点的に育てていく。

(1) 手立て① 文章構成表について

本文の内容や段落だけでなく、児童の思考の整理ができる文章構成表を作成する。各段落の内容に対する自分の考えや思いを短い文章で表していくことにより、力②考えたことを短い文章で表す力を育てることができる。と考える。

(2) 手立て② 最終表現物に対する支援について

児童が文章構成表に書きためたことから、書く内容を焦点化させるための支援を行う。文章をなかなか書くことができない児童が頭の中で整理できなかった自分の書きたい内容について、整理することができるようなヒントカードを配布し、活用させることで、力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てることができる。と考える。

V 教師力向上実習Ⅱ

① 対象	名古屋市立公立小学校 第4学年1組25名(4名欠席)
② 期間	平成28年9月24日～10月21日
③ 単元	国語科「ウミガメの命をつなぐ」

1 実践の内容

実践Ⅱでは、「ウミガメの命をつなぐ」という説明文教材で実践をした(資料14)。この教材は、名古屋港水族館の取り組みを題材にしており、児童にとって身近な内容の教材である。そのため、児童が自分の思いや考えを持ちやすいだろうと考える。本単元では、自分の思いや考えを分かりやすく伝える文章を書けるようになることをねらいとしている。そのため、習得の段階では、本文内容の把握を行いながら、自分の思いや考えも文章構成表に書かせていく。そして、最終表現物として本文を読んで興味をもったことについての「紹介文」を書かせる。

2 単元計画

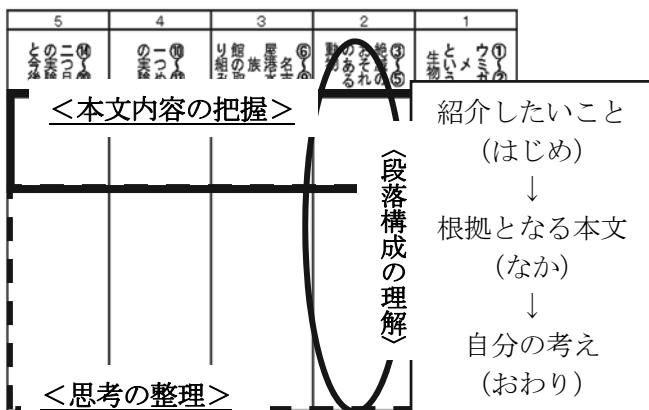
	学習内容	時数
習得	○学習の見通しをもつ ・名古屋港水族館について知る ・初発の感想を書く	1
	○ウミガメがどんな生き物なのか調べる ・新聞記事からわかることを読み取る ○ウミガメマップを完成する ・白地図に海岸名が記入されたマップにウミガメの情報を書き込む ・絶滅に恐れがあることを理解する	1
	○名古屋港水族館はウミガメの研究をどのように進めたか要約する ・本文に大事な語や文に線を引き、要約文を書く	2
	○「ウミガメ年表」を完成する ・名古屋港水族館の取り組みをまとめる	2
	○紹介文を書く ・紹介文の書き方を知る ・大事な語や文を基に、要約する ・要約した文章をもとに、興味をもったことが伝えられるように書く	2
活用	○紹介文を発表する ・友達と読み合い、交流する	1

【資料14 教師力向上実習Ⅱの単元構想】



### 手立て①文章構成表

本単元で扱う文章構成表(資料15)は、「紹介したいこと」、「根拠となる本文の内容(黄色の付箋)」、「自分の考え(ピンクの付箋)」を毎授業ごとに記述していくものである。「文章構成を考慮して書く」ために必要な力②考えたことを整理して短い文章で表す力を重点的に育てることをねらいとしている。本文読み取りの際から継続的に用いることで、その場面における自分の考えを蓄積させていくことができる。実践Ⅰにはなかった自分の考えを記入できる箇所を設け、自分の考えを表現するための資料として活用することが可能になるように改良した。このことで、児童が本文の内容の理解だけでなく、さらにワンランクアップして自分の考えをもつことを目指した。



【資料15 実践Ⅱにおける文章構成表】

### 手立て②紹介文を書く際の書き方ヒントカード

実践Ⅱの最終表現物である「紹介文」を書かせる際にヒントカード(資料16)を配布し、参考にさせる。これは力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てるためのものである。書き方ヒントカードは「紹介文」の文型を示し、児童が自分の考えをより伝わりやすくなる文章を書くことができるようにすることをねらいとしている。

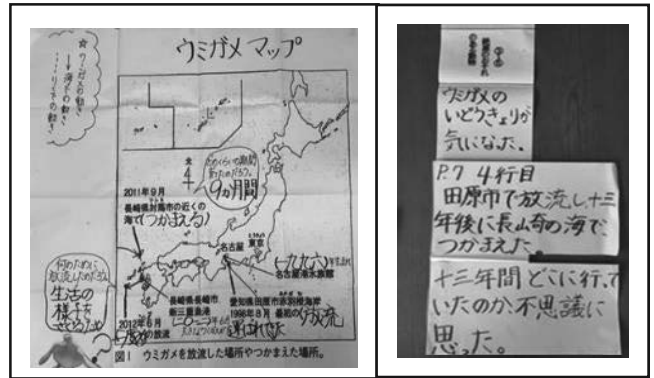


【資料16 授業で扱った書き方ヒントカード】

### 3 授業の様子

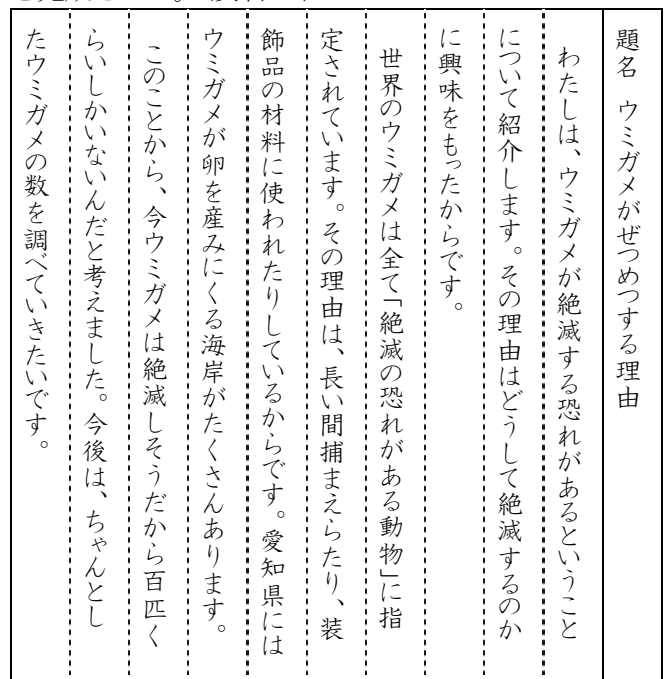
習得の場面では、段落ごとのワークシート(資料17)と、各段落で「紹介したいこと」「その根拠となる本文の内容」「自分の考え」を書き、まとめていく文章構成表(資料18)を同時に使い、本文内容を読み取った上で、文章構成表に書かせる活動を行い、それを

毎時間蓄積させた。



【資料17 実際の授業で扱ったワークシート】 【資料18 文章構成表の一部】

活用場面では、紹介文を書かせる。まず紹介文の構成を示し、「はじめ」には紹介したいこと、「なか」には本文の要約、「おわり」には自分の考えを記述していくことを確認させた。次にこれまで文章構成表に蓄積してきた「自分の考え」の中から、一番紹介したいことに丸を付けさせ、紹介文に書きたい内容として選ばせた。さらにそれぞれの児童が選んだ内容を基に、同じ段落を紹介する児童同士でグループを作り、「なか」の要約文を作成させた。「なか」の内容を書かせる際には、話し合いながら必要な言葉や文章を見つけさせ、要約文を考えさせた。そして、ヒントカードを参考にさせて、要約した内容を踏まえて、各自で「紹介文」を完成させた。(資料19)



【資料19 実際に児童が書いた紹介文の例】

### 4 実践Ⅱの結果と考察

#### (1) 検証項目 1

#### 【実践の結果】

検証1 文章構成表の作成と活用は考えたことを整理して短い文章で表す力を付けることに効果があったか。



- ① 「紹介文」のおわりの記述から検証する。
- A 自分が紹介したい内容を短い文章で表すことができている… 18人
- B 短い文章で表すことができていない… 4人
- ② 文章構成表の記述から検証する。
- C 自分の考えとその根拠となる本文の内容(図や表も含む)を明確に記述することができた…19人
- D 紹介したい本文の内容(図や表も含む)を明確にしているが、それに基づいた自分の考えを記述することができない… 1人
- E 自分の考えを記述することができたが、その根拠となる本文の内容(図や表も含む)を明確にすることができない… 2人

紹介文のおわりの文章の記述に、文章構成表の記述がどれだけ影響されているかを集計したものが以下の表である。(資料20)

「紹介文」のおわりの記述(短い文章)	文章構成表の記述			
	A	C	D	E
A	15	1	2	18
B	4	0	0	4
合計	19	1	2	22

【資料20 「紹介文」のおわりの記述が文章構成表に影響されているかどうか】

### 【検証項目1の考察】

8割以上の児童が「紹介文」のおわりに自分の考えを短い文章で表すことができていたことから、文章構成表は有効だったといえる。

「紹介文」のおわりを短い文章でまとめることができている児童(A)18人のうち、15人は文章構成表に自分の考えとその根拠となる本文の内容を明確に記述することができた児童(C)だった。この結果から、文章構成表を書くことができれば、「紹介文」につながる事が明らかになった。一方で、自分の考えとその根拠となる本文の内容を明確に記述することができた児童(C)19人のうち、「紹介文」のおわりの内容を短い文章でまとめることができない児童(B)は4人だった。以下その例を示す(資料21)。

題名 名古屋港水族館の二つの実験 ぼくは、送信機のつけ方について しようかいます。なぜなら送信機 みたいな物 付けているの不思議 に思ったからです。 (...略...) このことからウミガメは成長すると 海流には乗らず、自力でハワイの北 西から日本まで遠いきよりを帰って きたことがすばらしいと思いました。
--

【資料21 Bにあたる児童の「紹介文」の例】

このように、「はじめ」の内容が「おわり」の内容とずれており、「紹介文」が一貫した文章になっていないことが分かる。4人の児童は、図や表の非連続テキストを根拠として文章構成表を記述していた。本文中に記述がない参考資料も含まれていたため、本文の内容を自分の考えを結び付けることができなかった児童がいたと考えられる。

### (2) 検証項目2

#### 【実践の結果】

検証2 書き方ヒントカードの作成と活用は、考えたことを整理して短い文章で表す力を付けることに効果があったか。

「紹介文」のおわりの記述と「書き方ヒントカード」の使用状況などから検証する。(資料22)

「紹介文」のおわりの記述(短い文章)	「書き方ヒントカード」を使用したか		
	A	使用	不使用
A	14	4	18
B	3	1	4
合計	17	5	22

【資料22 ヒントカードの使用が短い文章でまとめることに影響したかどうか】

#### 【検証項目2の考察】

この結果から、一定数の児童が「書き方ヒントカード」を使って紹介文を短い文章でまとめることができていたことが分かった。

ヒントカードを使用しなくても書くことができた児童は4人いた。一方で、ヒントカードを使用したけど、短い文章で書くことができない児童(B)が3人いた。これらの児童は、検証項目1で明らかになったように、文章構成表には自分の考えとその根拠となる本文の内容が記述できていた。このことから、ヒントカードのねらいである、紹介文に書くべきことを焦点化することができなかったといえる。

これらのことから、「書き方ヒントカード」は、力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てるのに有効だったとは断言できない。短い文章でまとめて書くには、「見出し」を付けるなどもう一段階ステップが必要だったのではないかと考える。

## VI 研究のまとめ

本研究では、「文章構成を考えて書くことができる児童」の育成を目指して、「文章構成表」、「最終表現物に対する支援」を手立てとして取り組んできた。授業実践と通して明らかになった成果と課題を手立てごとに述べる。

### 1 本研究の成果

#### (1) 手立て① 文章構成表

本文読み取りの段階から文章構成表を作成していくことで、本文の内容や自分の考えの一覧

化ができ、最終表現物を制作する際の大きな支援となることが分かった。

実習Ⅰでは力①文章全体における各段落の位置付けを育てる力を育てるために、本文の内容を中心に記述させた。そうすることによって、児童の本文理解がより確実なものになった。

実習Ⅱでは、力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てるために、自分の考えを中心に記述させた。自分の考えを記述させる際、本文の内容と関連させて書かせることによって、本文内容の把握も同時にでき、さらに内容を短い文章でまとめることにつながるようになった。

## (2) 手立て② 最終表現物に対する支援

児童は文章を書く前に、頭の中で「どんな文章にするか」、「一つの段落に何を書くか」を考えて文章を構成している。それを頭の中だけで考えるのではなく、可視化することによって、児童の思考が活発になり、進んで文章の構成をすることができた。このことから、最終表現物の前段階として、最終表現物に対する支援を行うことで、「書くことは好き」なのに「書くことができない」というジレンマの軽減につながるようになった。

## 2 本研究の課題

### (1) 手立て① 文章構成表

力①文章全体における各段落の位置付けを育てる力を育てるための文章構成表では、各段落の内容のみに着目させるのではなく、筆者の「意見」と「事実」といった大きな枠組みで文章全体を捉えることができるようにする必要があった。そのためには、何について書かれているのかなどの「見出し」を考えさせると良かった。

力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てるための文章構成表では、本文の内容を読み取り、そこから自分の思いや考えをもたせることの難しさを感じた。児童が自分の考えをもつためには本文内容をしっかりと理解していることが大前提となるため、習得段階での本文の読み取りを正確に行う必要があると考える。

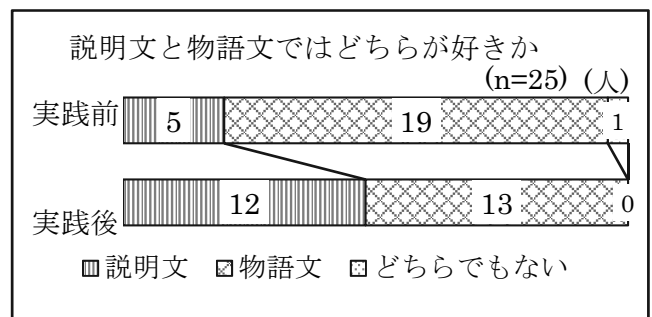
### (2) 手立て② 最終表現物に対する支援

力②考えたことを整理して短い文章で表す力を育てるための最終表現物に対する支援(絵コンテや書き方ヒントカード)では、本文の内容や自分の考えを一言程度の短い文章で書かせる指導の徹底が必要であった。児童が書くべき内容を整理するための十分な時間の確保をすることで、もう一度見直し、さらに考え、深めさせることができたと考える。児童が、書きたい内容のストーリーをよりイメージすることができる支援を考えていく必要があると考える。

## Ⅶ おわりに

本実践を終えて、児童の「発想力」の豊かさに驚かされた。実践Ⅱの文章構成表では、本文を読んで自分の考えを書く際に、本文だけではなく表やグラフなどの非連続テキストから考える児童もいた。複数の情報の意義やそれらの関係を捉え、整理して考えを表現するという今求められている力の萌芽が見られ頼もしく感じるとともに、児童の素朴な疑問や考えを引き出すことの面白さや素晴らしさを学ぶことができた。

文章構成表を使って説明文の文章構成を考えさせたことによって、児童の意識にも変化が見られた。以下は実践前後を比較したグラフである。(資料23)



### 【資料23 説明文と物語文どちらが好きかどうか】

この結果から、実践前に比べ実践後には、説明文が好きだと答える児童が増えたことが分かる。その理由には、「短く説明されていて読みやすい」や「新しいことを知れるから楽しい」などの意見が見られた。

このことから、文章の構成に着目させて文章を読ませることで、本文内容の理解度が高まり、児童の実感として「読んで楽しい」と思うようになることも分かった。

私は、児童の「生の声」を引き出すことができる教員になりたい。そのためには児童に自分の考えを表現することのできる力を付けさせることが必要不可欠であることを再確認した。今後は、伝えたい思いを、全員が言葉にできる学級を目指し、書くことが得意だと思える児童を増やしていきたい。

#### 引用・参考文献

- \*1) 国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査(PISA2015)のポイント」
- \*2) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審 197 号)平成 28 年 12 月 28 日
- \*3) 名古屋市教育委員会「平成 27 年度全国学力・学習状況調査リーフレット小学校」
- \*4) 佐藤洋一「『習得・活用型学力』の開発と授業モデル 2 小学校中学年・説明文編」,2011
- \*5) 市毛勝雄「作文の授業改革論」(第 5 巻)明治図書,1997  
「言語技術教育としての国語科」(第 1 巻)明治図書,1998
- \*6) 岩下修「書けない子をゼロにする 作文指導の型と技」明治図書,2016

#### 【付記】

連携協力校にて学校サポーター活動や教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを、名古屋市立公立小学校では教師力向上実習Ⅲを、豊田市立公立小学校では特別課題実習をさせていただきました。実習中はご多忙の中、多くのご指導・ご助言をいただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。お世話になった全ての先生方に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、教職大学院に在学した3年間でお世話になった瀧田先生をはじめ、多くの先生方に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。